



Title	フィリピンの大学生が考える災害「復興」の形：台風ヨランダの被災地タクロバン市を事例に
Author(s)	
Citation	令和4（2022）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書．2023
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90963
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和 4 年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	おおの まな 大野 真奈	学部 学科	外国語学部 外国語学科	学年	3 年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	白石 奈津子	所属	人文学研究科		
研究課題名	フィリピンの大学生が考える災害「復興」の形—台風ヨランダの被災地タクロバン市を事例に—				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

■研究目的

日本は自然災害が多い国である。東日本大震災から 10 年が過ぎ、最近では台風や豪雨による水害が増え、南海トラフ地震の発生も懸念される。災害をめぐっては、壊滅状態になった被災地をどのような形で「復興」させるかが問題になるが、日本では長らく復興というものが、地域開発を前倒して実現する機会と捉えられてきた。しかしながらそこでは、被災者の感情との相違から、自治体による復興計画が進まない現象が起きている。それゆえ近年は、被災者に寄り添い、被災者自らが主体となって取り組む生活再建やコミュニティ再興の在り方が模索されている（大矢根 2015 など）。私は、MLE の一環で受講した人間科学部の授業にて、東日本大震災後の防潮堤建設計画に被災住民が反対した結果、計画の変更で成功した事例を聞いた際、日本と同様に自然災害の多いフィリピンでも同様の事例が起こっているのかを疑問に思った。

本研究は、以上の着想のもと、災害を経験したフィリピンの大学生へのインタビューを通じて、これからのフィリピンを担う世代の人々が目指す「復興」の形を明らかにする。具体的には、被災から 10 年が経とうとする台風ヨランダ（2013 年、国際名 Haiyan）の最大の被災地であるレイテ州タクロバンをフィールドとして、被災地がどのような形で復興を成し遂げ、災害を経験した人々が復興したまちについてどのように考え評価しているのか、そして、将来的に再び被災した際も含めて、何を「復興」として捉えるのかを明らかにする。

本研究の特色は、幼少期に大災害を経験し、被災直後の復興過程には主体的に関わることの難しかった世代を対象にインタビューを行うことで、これまでの研究（細田 2015 など）とは異なる新たな社会像を追求できる点にある。同時に、申請者自身と同年代のフィリピン人学生がまちや社会の未来像をどのように描いているのかを、同世代として聞き取って描き出すという点に、研究を実施する意義と特質があると考ええる。

引用文献：大矢根淳，2015，「現場で組み上げられる再生のガバナンス」清水展・木村周平編『新しい人間、新しい社会』京都大学学術出版会，161-193／細田尚美，2015，「自然災害のリスクとともに生きる」牧紀男・山本博之編『国際協力と防災』京都大学学術出版会

被災地の「復興」が目指すゴールについて、市野澤 (2015)は、タイ南部のビーチリゾートを対象とした調査から、地域住民が必ずしも「復興」として防災面や観光面の改良を望むとは限らないことを示している。本研究は、この「復興」のゴールが必ずしも一つに限定されないという発想をフィリピンに应用して、調査研究を行った。

■研究対象概要

本研究が研究対象とするのは、2013 年 11 月 8 日にフィリピン中部のビサヤ地域を直撃し甚大な被害をもたらした台風ヨランダの被災地、レイテ州タクロバン市である。ヨランダの被災によって、2014 年 3 月 6 日時点で死者 6,245 人、行方不明者 1,039 人を出した(鈴木 2014)。

■研究計画

具体的には、フィリピンでの現地調査を中心に、以下のような 3 つのフェーズで研究を行った。

① 文献調査:~8 月まで

台風ヨランダによる被害やその後の復興過程について、1)政府のレポートや 2)国際機関の資料、3)現地新聞などをもとに、基礎的な情報を整理した。

② 約 2 週間の現地調査(景観の観察、インタビュー):8 月 22 日~9 月 4 日

現地調査では、受け入れ先である Eastern Visayas State University の学生を中心にインタビューを行った(コンタクト・パーソン Faustito Amador Aure 教授)。インタビューでは、以下の項目を中心に質問を投げかけつつも、対象者に自由に語ってもらう半構造化インタビューの形式を用いて、どのような語彙が用いられるのかを検討する。また、相互の意見交換を伴うグループインタビューを実施した。

【質問項目】: 被災前のまちの状況と復興後の様子を見て、台風ヨランダからの復興の形についてどのように評価するか、これからもし自分のまちで災害があった時どのように復興することを望むか、「復興」のゴールをどのように考えるか

③ 調査結果の分析と報告書の執筆:9 月~

どのような表現やビジョンで「復興」が語れるのかといった点に着目しながらインタビューをまとめることで、フィリピンの学生(次の時代を担う世代)が求める「復興の形」を明らかにしようとしている。

引用文献:市野澤潤平, 2015,「ブーケットにおける原形復旧の一〇年」清水展・木村周平編『新しい人間、新しい社会』京都大学学術出版会, 161-193/鈴木 有理佳, 2014,「スーパー台風直撃:2013 年のフィリピン」『アジア動向年報 2014 年版』

■研究方法

① フィールドワーク

2022 年 8 月 23 日と 24 日の日程で、タクロバン市においてフィールドワークを実施した。フィールドワークでは、タクロバン市においてがれきなどは残っておらず、高潮の被害を受けた建物も修繕が進んでいたことを確認した。海岸には防波堤が建設されているところもあった。一方でモニュメントやどこまで波が到達したのか示す線によって、被災の経験を形として残そうとしていた。またフィールドワークに同行してくれた現地の女性は、まちを巡りながら災害前はどのような場所であったか、災害時どのような状態であったかなどを詳しく解説してくれた。またその女性は、定期的にヨランダについての演劇に参加しており、ヨランダでの経験は忘れられてはならず、経験を後世につなげようとする動きも見られる。

② ワークショップ

2022 年 8 月 25 日に Eastern Visayas State University の学生 16 人を対象としてワークショップを行った。ワークショップでは、災害発生前のまちの様子と災害後のまちの様子について尋ねたが、災害前については話されることが少なく、災害時と災害後の様子についてよく語られていた。またマングローブを植林するプロジェクトがあり、それについては好意的である一方で、pabahay という居住地移転プロジェクトには不満があるということが話されていた。

④ 一対一のインタビュー

2022 年 8 月 26 日に②のワークショップの参加者のうちの 3 人に対して一対一のインタビューを実施した。前日に行ったワークショップで語られていたプロジェクトについての考えを話してもらった。そこでは防波堤はひとつの答えではないということ、災害を減らすことについて言及されていた。

④ グループインタビュー

2022 年 8 月 29 日と 30 日に Eastern Visayas State University において、②のワークショップの参加者 15 人を 3 つのグループに分け、グループインタビューを実施した。8 月 26 日に実施した一対一のインタビューでの語りなどをもとに、事前に 10 の質問項目を用意した。その質問に答えてもらいながら、グループの他のメンバーが話したことを受けて追加したいことについて話してもらった。インタビューは基本的に英語で行ったが、必要に応じてフィリピン語で答えてもらった。以下はグループインタビューでの質問項目である。

1. 台風ヨランダの後、社会の一員として、実施された復旧復興プロジェクトについて知っているか。もし知っているなら、どのようなプロジェクトか。
2. 上記のプロジェクトは現在まで行われているか、またそれが個人的にどのように役立ったか。
3. 既存のプロジェクトを踏まえて、今後のこの地域の発展に向けて、どのような復旧復興プロジェクトを提案したいか。
4. recovery rehabilitation reconstruction は終わったと思うか。なぜそう思うのか。
5. 災害への備えはなぜ必要だと思うか。
6. 高潮から身を守るためにマングローブを植え、防波堤を建設することについてどう思うか。
7. 災害リスク管理に関する現在の知識で、region8（タクロバン市のある東ビサヤ地域）を襲う可能性のある次の災害に備える準備が整っていると言えるか。
8. 災害への備えに関して、台風ヨランダの際の経験で若い世代に伝えられることは何か。
9. あなたの視点から見た、recovery rehabilitation reconstruction の最終目標は何か。
10. 10 年後の region8 はどのようなになっていると思うか。

■研究経過

グループインタビューの書き起こしを作成し、それをもとにポイントを抽出し整理して研究ノートとしてまとめることで、フィリピンの大学生が考える災害「復興」の形を明らかにする。

■研究成果

現段階として宮本らが新潟県中越地震の木沢集落での研究から明らかにしているように、被災後の語りというものには、時間経過に伴って変化していくものである。具体的には、地震のせいで被った被害について語っていたのが、地震のおかげで地域を見直すことができたという語りに変化した。行政への依存が語られていたのが自分たちでやろうという語りに変化した。そうした地震に対する解釈の変化が、地震の経験を糧にして未来を積極的に生きる契機となったことを明らかにしている（宮本 2009 年）。

タクロバンでのインタビューにおいても、こうした復興の主語、主体に関連する語りが散見された。

「実際にはまだ終了していません。なぜなら、彼らは多くの台風が来ることを考慮して開始されたものをまだ再建し続けているからです。政府は継続的な寄付を行っていないため、EVSU (Eastern Visayas State University) も完了するまでに時間がかかります。多くの進行中のプロジェクトが完了していません。資金調達や天候の問題が多く、完了するのは容易ではありません (20 代男性)」

このインタビューにおいては、復興が終わったかという問いに対し、自分自身がどうかではなく、タクロバン全体やプロジェクトについて語られていた。

「私が言えることは、これらの計画を立てたいのであれば、地域、コミュニティ、または社会が災害リスク管理のために何が必要であるか、または何が必要とされているかを、深く理解する必要があるということです。私たちは

その特定の場所や地域の特定のニーズが何であるかを知らずに、単に計画して建設するだけではいけません。(30 代男性)」

「たとえば、バランガイ（フィリピン行政の末端組織）は適していないプロジェクトがあると（ほかのインフォーマントが）述べていますが、これは正しいです。たとえば、あなたが低地において、バランガイの役人がマングローブを建設する場合、マングローブはいいですが、厳密に言うとなんかを助けることはできません。（他のインフォーマントの同意する様子）おそらくそれはすべてのバランガイの役人が考えなければならないことです。(20 代女性)」

「私たちのバランガイパロでは、実際にはバランガイだけでなく、人々もこのプロジェクトを運営していますが、私はこれから何の助けも受けませんでした。この悲劇の中で私を本当に助けてくれるのは自分だけです (30 代男性)」

一方で行政への依存という点では、上の語りで「私はこれ（プロジェクト）から何の助けも受けませんでした」と言っているように、現在行われているプロジェクトには不満がある。一方で「特定の場所や地域の特定のニーズが何であるかを知らずに、単に計画して建設するだけではいけません」と言っているように、復興を進めるのはあくまでも行政であり、積極的に自分たちにできるとは語られていなかった。

「準備することは非常に重要であり、ここタクロバンではコミュニティのメンバーの一員として、通常ここで台風、特に警戒度の高い台風が発生すると、タクロバンの人々はすぐに移動するか、避難します。（それは）私たちはもはや（ヨランダのとき起きたことが）起こることを望んでおらず、過ぎ去った経験から学んだようです。(20 代女性)」

「私たちが台風ヨランダで経験したことは、教訓として記憶されるべきだと信じています。間違いから学び、台風ヨランダの前の準備不足から学ぶ。なぜなら、台風ヨランダが実際に強いスーパー台風の初めての経験だったからです。私たちはそのような被害や影響を想定していませんでした。(20 代男性)」

台風ヨランダの経験について、その経験は糧や教訓として語られていた。

以上が

- ① タクロバン全体の復興とプロジェクト
- ② 行政への依存と復興の主体
- ③ 台風ヨランダの経験

などが重点となることが示している。

今後はこれらの点に着目して分析を進めることで、フィリピンの大学生が考える災害「復興」の形を明らかにする。

宮本匠，渥美公秀，2009，「災害復興における物語と外部支援者の役割について～新潟県中越地震の事例から～」『実験社会心理学研究』